

毛沢東の革命的戦争論

田 畑 忍

一

毛沢東は一八九三年（明治二十六年）^{（註）}に生誕した。中国湖南省湘潭縣韶山冲村の中農の出身である。本年（一九六七年・昭和四十二年）は七十五歳ということになる。

（註）一八九三年は、レーニンが二十四歳、スターリンが十五歳、孫文が二十五歳、康有為が三十六歳、梁啓超が二十一歳、陳独秀が十五歳、蔣介石が八歳、朱徳も八歳、李大釗が六歳になっている。劉少奇や周恩來はしかし未だ生れていない。

日清戦争が始まったのは翌一八九四年で、その翌年には孫文の拳兵があり、数年後（一九〇〇年）には義和団事変が起っている。孫文は最初の革命に失敗して日本に亡命したが、宮崎滔天・犬養毅等と大いに意気投合した。梁啓超もその頃来日して、中国革命同盟会が東京に結成されたのが日露戦争（一九〇四・五年）の二年目である。彼等は東京で機関誌「民報」をも発行した。

毛沢東は、当時、『岳飛伝』『水滸伝』『三国志』等に読み耽る少年時代を過していた。もちろん経書や時局論も

読み、世界各国の英雄伝も耽読し、また地理・歴史も学んだが、のちに康有為・梁啓超等の著作を熟読するようになり、湘郷中学時代に「辛亥革命」が勃発（一九一一年）したときには革命軍に入っている。革命後に孫文を大総統として中華民国が成立したが、毛沢東はすぐ軍隊をやめて学業に帰った。すなわち高等商業や中学で学び、更に独学を経て第一師範学校に入学し、ダーヴィン・ミル・スミス・ルソー・スペンサー・モンテスキュー等を濫読した。そして二十六歳の時に師範学校を卒業して、北京図書館ではたらくことになり、のち小学校長にもなっている。丁度この北京時代に、第一次世界大戦（一九一四年）があり、ロシア十月革命（一九一七年）が勃発した。

最初、毛沢東は師範学校の教師（のちに北京大学教授）揚昌済の感化を受けて、カント流の自由主義・社会主義の思想をもっていた。『心の力』という文章を書いたのもそのゆえである。即ち彼は、こうした傾向の思想の文化運動にたずさわり、その線での文化活動や学生運動に従事しながら、ロシア革命やマルクス主義にかんする書物（マルクス『共産党宣言』・カウツキー『階級闘争』等）を読むようになった。そうして自らをマルクス主義によって武装するようになったのである（一九一九年・大正八年）。それには北京図書館の主任であった李大釗の影響も想像できよう。しかし陳独秀から最も大なる影響を受けたことを自身で告白している。かくして一八二一年（大正十年）、揚教授の娘・開慧と結婚した二十九歳のとき、彼は中国共産党の創立に参画した。当時、周恩来はパリで、劉少奇は安源で、それぞれ活動を開始していたのであるが、毛沢東が労働組合の組織だけでなく、中国人口の圧倒的な多数を占める数億の農民に着眼して、その階級的かつ革命軍的な組織の必要を強調（『湖南省農民運動の視察報告』参照）し、反対と困難を押しきって、この運動に成功した事実はとくに評価すべきであろう。

すでに「連ソ容共」にふみきっていた孫文が、いわゆる「三民主義」の講演をした一九二四年（大正十三年）は、レ

ーニン死去の年であるが、孫文もその翌年に没している。孫文を継承した王兆銘のあとを襲った蔣介石は、しかし間もなく容共政策をすててクーデターを起し、国民党と共産党の提携を断って、孫文とは異った道である反革命戦争の路線を歩み出した。かくして、毛沢東が、蔣介石に対決して井岡山等での苦戦を経験し、赤軍第四軍の党代表になったのは、一九二八年（昭和三年）、三十六歳のときである。また一九三一年（昭和六年）、「中華ソビエト共和国」が成立して、毛沢東はその主席になった。恰かもこの年に、日本帝国主義の満洲侵略が開始され、彼は蔣介石国民党軍の相次ぐ「包囲戦」に対して赤軍を率いて反「包囲戦」を展開し、一九三四年苦境を脱するため更に苦難に満ちた二万五千里の「長征」（遊撃的・運動的（註一）な作戦）を敢行しつつ農民大衆を組織し、解放軍を強化したのである。すなわち約一年にわたったこの長征の間に抗日戦の準備を整えて、保安に到り更に延安に移って不敗の根拠地とした。ここにおいて、彼の作戦は「動」から、「動」を含んだ「静」に転じたのである。

一九三七年、その必至と考えていた日中戦争の開始となり、彼はこの防衛的民族戦争に従事しつつ、共産党と共産党軍に対する不拔の指導権を確立した。同時に、その経験した作戦に基づいた特異の革命的戦争論を築き上げたのである。否、マルクス・レーニン主義を革命の実践によって深め得た毛沢東思想が、いかなる事態にも動じなくなっていたとエドガー・スノウの言っているその延安に於ける十二年間に（四十一才から五十三才まで）、或いはまとめられて講義となり、また著作となった。すなわち主著である『矛盾論』（註二）、及び『持久戦について』『中国革命戦争の戦畧問題』『抗日遊撃戦争の戦畧問題』『新民主主義論』『連合政府について』などが、すべて延安における「静」かなる研學と思索と作戦のまったただ中で書かれているのである。

私は、毛沢東思想の根源たるその人物・性格については、これを一言にして言えば仁と知と勇とを兼備し鉄石の如

き体力にも恵まれた英雄・偉人のそれである、と思うものである。^(註三)

(註一) 有名な「長征」の詩は、その時の作である。曰く、「紅軍は遠征の難きを怕れず、万水千山ただ等閑たり、五嶺は透りに迤りて細浪を騰らせ、鳥蒙は磅礴として泥丸を走らす、金沙の水拍ちて雲崖暖かく、大渡橋鉄索を横えて寒し、更に喜ぶ岷山千里の雪、三軍過ぎたるのち尽く開顔。」
(註二) 『矛盾論』で彼は辛亥革命以後の中国の革命の発展を分析して次ぎのように言っている。曰く「この長い時間のあいだには、辛亥革命の失敗と北方軍閥の支配、第一回目の民族統一戦線の樹立と一九二四年→一九二七年の革命、統一戦線の分裂とブルジョアジーの反革命への移行、新しい軍閥闘争、土地革命戦争、第二回目の民族統一戦線の樹立と抗日戦争などの大きな出来事を経過し、二十余年のあいだにいくつかの発展段階を経過した。……国共両党を例にとると、国民党の側は、第一回目の統一戦線の時期には、孫中山の連露、客共、労農援助の三大政策を実行したので、革命的で新鮮の氣にみち、民主主義革命のための各階級の同盟体であった。一九二七年以後は、国民党は、これとは反対の方向にはしり、地主と大ブルジョアジーの反動集団となりはてた。一九三六年十二月の西安事変以後は、また、内戦を停止し、共産党と提携し、日本帝国主義にたいし共同してたたかう方向に転換しはじめた。これがつまり、三つの段階における国民党のもつ特徴である。……中国共産党の側は、第一回目の統一戦線の時期には幼年期の党であった。それは一九二四年→一九二七年の革命を英雄的に指導しはしたが、革命的性質、任務、やりかたについての認識の面ではその幼稚さをしめし、そのために、この時期の革命の後期に発生した陳独秀主義がある影響をおよぼすことができた。このために、この時期の革命は失敗をこうむった。一九二七年以後、それはまた、土地革命戦争を勇敢に指導し、革命的軍隊と革命の根拠地を創造した。だが、それはまた、冒険主義の誤ちをおかしたために、軍隊と根拠地に非常に大きな損害をあたえた。一九三五年以後、それはまた、冒険主義の誤ちを是正し、新しい抗日のための統一戦線を指導するにいたった。この偉大な闘争はいまなお発展をつづけている。この段階では、共産党は、二回の革命の試験を経た。豊富な経験をもった党となっている。これらの点が、三つの段階における中国共産党の特徴である。……これらの特徴を研究しなければ、それぞれの発展段階における二つの党の特殊な相互関係——統一戦線の樹立、統一戦線の分裂、および、もう一つの統一戦線の樹立——を理解することはできない。そして、この二つの党のいろいろの特徴を研究しようとするには、もっと根本的に、この二つの党のもつ階級的基礎、および、それによって各時期に形成されたこの二つの党と他の方面とのあいだの矛盾の対立を、どうしても研究しなければならない。たとえば、国民党が最初に共産党と提携した時期には、国民党は、一面では、国外の帝国主義とのあいだの矛盾をもっていたので帝国主義にたいしてたたかったが、他面では、国内の人民大衆とのあいだの矛盾をもち、口先だけでは勤労人民にいくたの利益をあたえることをゆるしてはいたが、実際にはごくわずかの利益をあたえたにすぎないか全然なにもあたえなかった。彼らが反共

戦争をおこなった時期には、帝国主義、封建主義と協力して人民大衆とたたかい、人民大衆がすでに革命のなかでたたかいていたすべての利益を抹殺してしまい、彼らと人民大衆とのあいだの矛盾を激化させた。いまの抗日の時期には、国民党は日本帝国主義とのあいだに矛盾をもつてをり、彼らは、一面では共産党と提携しようとするが、同時にまた、共産党や国内人民にたいしてはけつしてその闘争や圧迫をゆるめないのである。共産党は、いづれの時期にも、つねに大衆と同じ側に立って、帝国主義と封建主義にたいしてたたかった。だが、現在の抗日の時期には、国民党が抗日の態度をしめしているので、共産党は国民党や国内封建勢力にたいしても緩和された政策をとっている。こうした情況のために、あるいは両党の提携となり、あるいは両党の闘争となったし、また、たとえ両党が提携している時期においてさえ、一面提携、一面闘争の複雑な情況がうまれたのである。」

(註三) 例えば、『中国の赤い星』の著者エドガー・スノウは、長征を終えて一先ず落ち着いた保安における毛沢東について、「やせたリンカーンのような人物で、中国人の平均身長より高く、やや猫脊で、頭には濃い髪の毛が非常に長くのび、大きな鋭い眼をもち、鼻は鼻梁が高く、かん骨がつき出していた。私の一しゅんの印象では、非常に機敏な知的な顔という感じだった」と言い、演説と文筆と記憶力にすぐれた非常な哲学者であり歴史家であり、世界の動きに精通していたと一九三六年(四十二歳)の毛沢東を評している。また延安時代の後期(五十歳台)の彼の印象を、何ものにも動じない慈愛の感じをもただよわせた人物になっていたと述べている。また七十歳に近くなった権力把握後の彼については、「ゆったりとして」「機智に富んだ会話を楽し」み、「また非常にはげしい気性の持主でもある」(スノウ『中国もう一つの世界』上)と描写している。一九五九年秋十月、私は北京で会見した時の毛沢東について、英智を秘めた寡黙のヒューマニスティックな威張っていない英雄というふうに思った。また「一言も物を言わざる温顔の英雄の如き毛沢東大人」と言うのが、十周年国慶節慶祝式上における毛沢東についての私の即興的な印象である。

二

毛沢東の革命的戦争論は、それにさきだった革命的戦争の極めてけわしい実践によって成熟し、一九三七年(昭和十二年)に始った日中戦争の時期をピークとして、その前後にまたがって延安時代に展開された。そうしてそれは、一九四五年(昭和二十年)の日本の敗戦と革命成就の時にまで及んでをり、またその後にもいたっている。すなわち次ぎ

の如きものが先ず数えられる。

曰く『井岡山の闘争』（一九二八年）・『小さな火花も広野を焼きつくす』（一九三〇年）・『日本帝国主義に反対する戦術について』（一九三五年）・『中国革命戦争の戦畧問題』（一九三六年）・『抗日の時期における中国共産党の任務』『抗日民族統一戦線に何百何千万の大衆の参加をかちとるためにたたかおう』『国共合作成立後のさしせまった任務』『上海太原陥落後の抗日戦争の情勢と任務』『イギリスの記者バートラムとの談話』（一九三七年）・『抗日遊撃戦争の戦畧問題』『持久戦について』『中国共産党の民族戦争における地位』『統一戦線における独立自主の問題』『戦争と戦畧の問題』（一九三八年）・『敵に反対されるのはよいことであって、悪いことではない』『投降活動に反対す』『中国革命と中国共産党』（一九三九年）・『投降の危険を克服し、時局の好転をたたかおう』『すべての抗日勢力を結集して反共頑迷派に反対しよう』『抗日根拠地の政権問題』『当面の抗日統一戦線における戦術問題』『思いきって抗日勢力を発展させ、反共頑迷派の進攻に抵抗せよ』（一九四〇年）・『反ファシストの国際統一戦線について』（一九四一年）・『第二次世界大戦の転換点』『抗日時期における経済問題と敗政問題』（一九四二年）・『根拠地の減租・生産・擁政愛民運動をせよ』（一九四三年）・『軍隊の生産自給を論じ、兼ねて整風と生産の二大運動の重要性を論ず』『日本侵略者に対する最後の戦』『抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針』『蒋介石は内線を挑発している』『減租と生産は解放区を守る二つの大事である』（一九四五年）等々である。

これらの革命的戦争論を含んだものを、政治論ときりはなして考え得ないことは言うまでもない。すなわち、この時期に、彼が『蒋介石の声明についての声明』（一九三六年）『実践論』『矛盾論』『自由主義に反対する』（一九三七年）・『反動派を制裁せよ』『ソ連の利益と人類の利益の一致』『知識人を大量に吸収せよ』『中国革命と中国共産党』

『スターリンは中国人民の友である』『ベチューンを記念する』（一九三九年）・『新民主主義論』『団結と進歩を強調しなければならぬ』『新民主主義の憲政』『政策について』（一九四〇年）・『われわれの学習を改革しよう』（一九四一年）・『党の作風を整えよう』『党八股に反対しよう』『きわめて重要な政策』（一九四二年）・『国民党に問う』『組織せよ』（一九四三年）・『学習と時局』『人民のために奉仕する』『蔣介石の双十節演説を評す』『文化活動における統一戦線』（一九四四年）・『経済活動に習熟しなければならない』『中国の二つの運命』『連合政府について』『愚公、山を移す』『ハーレーと蔣介石の猿芝居はすでに破算した』『ハーレー政策の危険について』『蔣介石スポークスマンの談話を評す』『国民党と和平交渉をすすめることについての中共中央通知』『重慶交渉について』『国民党進撃の真相』『一九四六年解放区工作の方針』『堅固なる東北根拠地をぎずこう』（一九四五年）などを、書いていることによって明らかである。

殊に、日中戦争勃発四年目の一九四〇年（昭和十五年）に、『新民主主義論』を発表していることは、その勝利の満々たる自信のほどを示すものである。同年に、汪精衛が日本の軍閥に屈して「和平建国宣言」をしたこととの対比に於て見れば、その見透しの正しさは一層明らかであろう。更に、それ以後における党づくりと解放区の組織、及び対蔣介石工作とその諸論策とを見ることがよって、われわれは毛沢東の戦争論が、本質に於て単なる戦争論と全く異った革命的戦争論であることを知ることができよう。すなわち彼の革命的戦争論は、半植民地であった中国を如何に革命的に解放するかについての革命の理論にほかならないからである。のみならず、その戦争論は、具体的には先ず中国を最も大きく侵襲しつつあった日本の軍閥に対する抗日的戦争論でなければならなかったのである。次いで、その革命的戦争論は、日本の敗戦前後からは、当然に蔣介石の背後にあったアメリカ帝国主義に立ち向わざるを得なかつ

たのである。いわゆる帝国主義の一国（日本）が、半植民地であった中国に対する侵略戦争に敗れ去ったあと、こんどは帝国主義の他の一国（米国）が、戦争によってでなく、「政治的、経済的、文化的に、比較的温和な形態によって圧迫してくるとき」になって、再び「半植民地国の支配階級」が「帝国主義に屈服し、両者が同盟を結び、共同して、人民大衆を圧迫する」（『矛盾論』参照）ようになったからである。すなわち人民大衆は、「国内戦争の形態をとって、帝国主義と封建階級の同盟にたいしてたたかい」（同上参照）を挑まざるを得なくなつて、毛沢東はアメリカ帝国主義の傀儡軍的支配者たる蔣介石に対する作戦を遂行し、その成功の過程に於て、まさにそれに必要な諸論策を執筆したのであり、引きつづいてアメリカ帝国主義に対して強くかつ鋭い批判を加えるようになったのである。

それらのものは例えば、日本の敗戦の翌年（一九四六年・昭和二十一年）の執筆である『当面の国際情勢についてのいくつかの評価』、『自衛戦争によって蔣介石の攻撃を粉碎せよ』、『優秀なる兵力を集中して敵を各個に殲滅せよ』、『アメリカの「調停」の真相と中国の内戦の前途』、『二ヶ月の総括』、それから『アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話』・一九四七年（昭和二十二年）に発表した『中国革命の新しい高まりを迎えよう』、『蔣介石政府はすでに全人民の包囲のなかにある』、『解放戦争第二年目の戦畧方針』、『中国人民解放軍宣言』、『当面の情勢とわれわれの任務』、『当面の国際情勢についてのいくつかの評価』・一九四八年（昭和二十三年）に書き示した『軍隊内の民主運動』、『異った地区で土地法を実施するうえで異った戦術』、『土地改革の宣伝における「左」翼的誤りを是正せよ』、『新解放区における土地改革の要点』、『工業政策について』、『民族ブルジョアジーと開明紳士の問題について』、『西北地方の大勝利を評し、あわせて解放軍の新しい型の整軍運動を論ず』、『一九四八年の土地改革工作与整党工作』及び『全世界の革命勢力は結集して帝国主義の侵略に反対しよう』、『中国の軍事情勢の重大な変化』、『革命を最後まで遂

行せよ』等々の文章、蔣介石が総統を辞任し毛沢東が人民共和国主席に選ばれて、中華人民共和国の成立した一九四九年の幾多の評論・声明・談話・電報（『軍隊を工作隊に変えよ』等）・演説、殊に中共二十八周年記念の『人民民主専制を論ず』の文章、アメリカの中国白書を批判した『幻想を棄てて、闘争を準備せよ』『人民民主主義独裁について』『さらば、スチュアート』『なぜ白書を討論しなければならないか』『友情か、それとも侵略か』『観念的歴史観の破産』等の評論、一九五〇年（昭和二十五年）の『国家の財政経済状況の基本的好転のためにたたかおう』『いかなる困難も人民の事業の前進をさまたげることはできない』『第二の関門を突破しよう』等の演説になってあらわれているのである。また一九五三年（五十九才）には、『スターリンの死を悼んだ』『もっとも偉大な友情』を発表し、一九五五年（六十一才）には『農業協同化問題について』の報告を書いてをり、一九五七年（六十三才）には「敵と味方の敵対的な矛盾」と「人民内部の非敵対的な矛盾」について指摘して肅正と批判と教育の方法を詳論した『人民内部の矛盾の正しい処理の問題について』演説し、また「東風は西風を圧倒した」という提言で有名な演説をソ連最高ソヴェト会議で行っている。

そうして一九五一年以降、中国革命の成就とともに、『毛沢東選集』一・二・三・四巻が相次いで刊行され、各方面の革命的政策による大躍進とともに思想改造運動を展開し、人民公社の組織と「百花齊放」「百家争鳴」の段階から、最近の文化大革命と毛沢東思想を護る紅衛兵の奪権運動を起来しているのであり、『毛沢東語録』が今日中国とその人民大衆の中に紅く氾濫しているのである。

その間、毛沢東は、一九五九年に国家主席を劉少奇にゆづり、党首席として現在にいたっているのであるが、この翌年以降、アメリカ帝国主義との妥協的傾向をあらわにするにいたったソ連と中国との国交が、日を追ってけわしい

ものになっている。すなわちアメリカ帝国主義に対する攻撃と同時に、フルチン・ヨフ等のソ連修正主義に対する批判の増強激化となり、更に国内における修正主義的権力主義派に対する文化革命の遂行となって現れざるを得なくなったであろう。換言すれば、マルクス・レーニン主義の正統を継ぐ毛沢東主義が、今や中国において奪権のために過度にまで強調されているゆえんであろう。

三

毛沢東の革命的戦争論は、これを戦争本質論と戦畧・戦術論とに大別することができよう。『矛盾論』と『実践論』が、その革命的戦争論の基礎理論になっているだけでなく、その政治論・時局論・政策論なども、すべてそれにかかわりをもっていることは言うまでもないであろう。しかし、ここでは其の革命的戦争論中の戦争本質論について主として考察することにする。^(註)

(註) 多くのその論策のうちで、とくに『中国革命戦争の戦畧問題』（一九三六年）・『持久戦について』（一九三八年）等の代表作と言われているものにウェートを置くことにするが、その他のものももちろん引用しなければならぬ。

(一) 毛沢東の戦争論が、単なる戦争論でなくて、とくに革命的戦争論であることについては前述の如くであるが、例えば彼は、『中国革命戦争の戦畧問題』に於て、先ず「われわれの戦争は革命戦争であって、この革命戦争は、中国という半植民地的・半封建的な国ですすめられている」と言っているとおり、その関心事はもっぱら中国の革命であり、革命的戦争である。「われわれは革命戦争方能論者である」（『戦争と戦畧問題』）と言っているぐらいである。そして、マルクスやレーニンと共に、「革命は、客を招いてごちそうをすることもなければ、文章をつくったり、

絵をかいたり、刺しゅうをしたりすることでもない。……革命は、暴動であり、一つの階級が他の階級をくつがえす活動である」(『湖南農民運動の視察報告』)と言ひ、また「革命の中心任務と最高形態は、武力による政権の奪取であり、戦争による問題の解決である」(『戦争と戦略問題』)、と言っている。つまり彼は革命は武闘であり戦争の一種であつて、革命には行きすぎが必要である、と云うことを強調するのである。それは、修正主義に比ぶれば教条主義になお幾分かのとおりであるとする考え方に共通する。

もちろん毛沢東は戦争一般の定義も下している。曰く「戦争——それは私有財産と階級が発生してからはじまつたものであり、階級と階級、民族と民族、国家と国家、政治集団と政治集団とのあいだの一定の発展段階での矛盾を解決するためにとられる最高の闘争形態である」と。すなわちそれは戦争を広義に解して理解しているものであつて、戦争を国際戦争に限定する狭義の戦争概念をとっていないことが明らかであろう。同趣旨のことが、『持久戦について』では次ぎの如くに述べられている。曰く「戦争とは政治であり、戦争そのものが政治的性質をもつた行動であつて、昔から政治性を帯びない戦争はなかつた。……だが、戦争にはその特殊性があり、この点からいへば、戦争がそのまま政治一般ではない。戦争は別の手段による政治の継続である」。「政治が一定の段階にまで発展して、もうそれ以上従来どおりには前進できなくなると、政治の途上によこたわる障害を一掃するために戦争が勃発する。……障害が一掃され、政治目的が達成されれば、戦争は終わる。障害がすっかり一掃されないうちは、目的をたらぬくために、戦争は依然として継続されるべきである。……政治は血を流さない戦争であり、戦争は血を流す政治であるといえる」。そうして彼は、戦争にもとづく特殊な組織としての「軍隊およびそれに付随するいっさいのもの」、特殊な方法としての「戦争指導の戦術」、特殊な過程としての「攻撃もしくは防禦をおこなう特殊な社会活動の形態」の存する

ことを述べて、「戦争の目的はほかでもなく、「自己を保存し、敵を消滅する（敵を消滅することは、敵のすべてを肉体的に消滅することではなくて、敵の武装を解除すること、つまり「敵の抵抗力をうばう」ことをいう）ことである。……自己を保存し、敵を消滅するという戦争の目的こそ戦争の本質であり、すべての戦争行動の根拠であって、技術的行動から戦畧的行動にいたるまでのすべてが、この本質によってつらぬかれている。戦争目的は戦争の基本原則であり、すべての技術的・戦術的・戦役的・戦畧的な原理原則は、それから少しもはなれることはできない」。このように彼は説いている。これらの戦争観が、レーニンの戦争論に大きな影響を与えた帝政ドイツの将軍クラウゼヴィッツの『戦争論』に共通した理論に立脚した見解であることは、論証を要しないところであろう。

(註) 政治について毛沢東はまた次ぎの如くに述べている。曰く「政治は、革命の政治であると、反革命の政治であるとを問わず、すべて階級対階級の闘争であって、少数の個人の行為ではない。革命の思想闘争と芸術闘争とは、かならず政治闘争に従属せねばならない。なぜなら、階級および大衆の要求は、政治を通じてのみ、集約的に表現されるからだ。……」（『文芸講話』）と。

(二) しかし毛沢東の戦争論は、レーニンのそれとともに、決してクラウゼヴィッツの戦争論の単なる受け売りではない。また孫子の兵法をそのままに継受したものではない。例えば彼は、歴史を大きく三つに分けて、第一は自然との戦争・第二は氏族制社会の末期から今日にいたる国家相互の戦争・第三は永久平和の時代、このように永久に戦争のない時代を考えているのである。のみならず戦争を残酷なものと言い、「怪物」だと言い、この残酷なる「怪物」の戦争を克服するものは革命戦争のほかにはないとする戦争否定の論理を展開しているのである。クラウゼヴィッツや孫子にはもちろんそのような考想は皆無だったと言ってよい。それ故、それは、クラウゼヴィッツ流の戦争一般論ではなくて、クラウゼヴィッツなどとは全く異った戦争否定の革命的戦争論だということになるのである。換言すれ

ば、それは戦争否定の論理であり、そのために革命戦争が必要だと言う革命必要の論理にほかならないのである。

すなわち毛沢東は次ぎのように言っている。曰く「革命的な階級戦争や革命的な民族戦争は、戦争一般の状況や性質のほかに、その特殊な状況や性質をもっている。したがって、戦争一般の法則のほかに、いくつかの特殊な法則がある。それらの特殊な状況や性質がわからず、その特殊な法則がわからないならば、革命戦争で勝つこともできない」(『中国革命戦争の戦略問題』)と言っているように、毛沢東の戦争論は革命に於ての勝利を目的とした革命的戦争論なのである。否、それは、とくに中国の革命戦争に勝つための革命的戦争論にほかならない。すなわち「国内戦争といわず、民族戦争といわず、それは中国という特殊な還境のもとですすめられているので、戦争一般および革命戦争一般にくらべて、その特殊な状況・特殊な性質をもっている。したがって、戦争一般および革命戦争一般の法則のほかに、いくつかの特殊な法則がある。これらのことがわからなければ、中国の革命戦争で勝つこともできない」(前掲書参照)、と言っているゆえんである。例えば彼は、『矛盾論』で帝国主義が中国のような半植民地国家に対して侵略戦争(すなわち一八四〇年のアヘン戦争、一八九四年の日清戦争、一九〇〇年の義和団戦争、および一九三七年の中日戦争の如き侵略戦争)を行っているときには、それが主たる矛盾となつて、「このような国家の内部の諸階級は、一部の帝国主義分子をのぞけば、みな、一時的には、団結して民族戦争をおこなうことにより、帝国主義に対してたたかうことができる」。しかし帝国主義が国内の封建・支配階級と合体して圧迫してくる時には国内戦争の形をとつて、「内部的矛盾の特殊な尖鋭さがあらわれてくる」と言つて、戦争の特殊な法則について述べている。

毛沢東の戦争にかんする数多い論策のすべてが、否その革命的实践行動のすべてが、中国の革命的戦争に勝利を収めて「新民主主義」^(註)の中華人民共和国をうちたてることに方向づけられていたのである。従つて、彼は、革命的戦争

以外の戦争を主張する意思をすこしも有していなかったものと言わねばならない。しかも、そのような革命的戦争を遂行するためには、それに必要な戦争についての一般的法則の研究をしなければならぬとするのであるが、それはロシア革命に勝利を収めたレーニン（拙稿『レーニンの革命論』参照）の場合と本質的には何ら異なるものではない。否、レーニンなくして毛沢東はないのである。かくして毛沢東は、レーニンとともに「歴史上の戦争には、正義のものと不正義のものとの二種類しかない。われわれは、正義の戦争を支持し、不正義の戦争に反対する」（前掲書参照）と断言する。すなわち彼は、革命的戦争は正義の戦争であり、反革命的戦争や帝国主義的戦争は不正義の戦争であると確信しているのである。

（註）彼は、『新民主主義論』（一九四〇年）に於て、次ぎの如くに言っている。曰く「いまわれわれが樹立しようとしている中華民主共和国は、プロレタリアートの指導のもとでの、反帝反封建のあらゆる人びとの連合独裁の民主共和国でしかありえず、これこそ新民主主義の共和国であり、また真に革命的な三大政策の新民主主義の共和国でもある」と定義し、それは旧民主主義共和国と異なるだけでなく、「ソ連型の、プロレタリア独裁の、社会主義の共和国」ともちがっている。すなわち半植民地たる中国における過渡的に必要な国家形態であると断定し、この政府は「民主集中制」であり、「民主専政」であり、その経済体制は社会主義的性質の国营経済であると規定している。「新民主主義の憲政」という表現も用いている（『新民主主義の憲政』（一九四〇年）参照）。それは「いくつかの革命的階級が連合して民族の裏切り者、反動派にたいしておこなう独裁である」というようにも定義している。また、人民に対しては民主、反動派に対しては専政の政治が「民主専政」であるとも言っているのである。

『持久戦について』に於ても、もちろん同様の叙述が見られる。曰く「すべて進歩的な戦争は正義の戦争であり、すべて進歩をはばむ戦争は不正義の戦争である。われわれ共産党員は、進歩をはばむすべての不正義の戦争に反対するが、進歩的な正義の戦争には反対しない。……前者の戦争、たとえば第一次世界大戦では、双方共、帝国主義の利益のために戦ったので、全世界の共産党員はその戦争には断固として反対した。反対する方法は、戦争が勃発するま

では、極力その勃発を阻止することであるが、すでに勃発してからは、その可能性さえあれば、戦争によって戦争に反対し、正義の戦争によって不正義の戦争に反対することである」。このように彼は、戦争を撲滅するための革命的戦争を正義の戦争、「神聖」なる戦争として肯定するのであり、不正義の戦争を徹底的に否定するのである。のみならず、不正義の戦争は必ず敗北し、正義の戦争は最後の勝利を収め得るものであると主張し、これは「道にそむく者には助力少なしという法則」〔持久戦について〕に於て日本軍閥の侵略戦争を批評した文章の一部〕である、と言うような表現もしている。その他のところでも、彼は同趣旨の表現をしばしば用いている。「真剣」とか、「不撓不屈」とか、「精神」とか、「奉仕」とか、「ごうまんをいましめる」とか、「謙虚」とか、「享楽主義の否定」とか「節約」とかということばも、彼の好んでよく使うことばである。

それ故、毛沢東思想には、精神主義・意思主義・倫理主義・理想主義・ヒューマニズムに充満した気骨が実に強く貫徹していることを否定し得ないであろう。その点で彼をマルキシストでないと評する者もあるぐらいである。

③ 不正義の戦争否定のかくの如き毛沢東の思想が、戦争終滅論に直結していることは、さきにも触れたとうりであるが、それは次ぎの如くに詳論されている。曰く「人類の戦争生活の時代は、われわれの手で終らせなければならぬもので、われわれがおこなっている戦争は、疑いもなく最終的戦争の一部分である。だがまた、われわれが直面している戦争は、疑いもなくもっとも大きな、もっとも残酷な戦争の一部である。もっとも大きな、もっとも残酷な不正義の反革命の戦争が、われわれの頭上にのしかかっている。われわれが、もっと正義の戦争の旗じるしをかかげないなら、人類の大多数はふみにじられるであろう。人類の正義の戦争の旗じるしは、中国を救う旗じるしである。人類の大多数と中国人の大多数がおこなう戦争は、疑いもなく正義の戦争であり、人類を救い、中国を救うこの

うえもなく光栄な事業であり、全世界の歴史を新しい時代にうつらせるかけ橋でもある。人類の社会で、階級を消滅し、国家を消滅するところまで進歩したとき、そのときにはどんな戦争もなくなる。反革命戦争もなければ、革命戦争もなく、不正義の戦争もなければ、正義の戦争もなくなる。これが人類の永遠の平和の時代である。われわれが革命戦争の法則を研究するのは、すべての戦争を消滅させようとするわれわれの願望からであり、これがわれわれ共産党員とすべての搾取階級とを区別する境界線である」。

毛沢東の革命的戦争論が、このように「永遠の平和のために戦う」戦争論であることの面目は、『持久戦について』の中で、いっそう明らかに示されている。曰く「……歴史上のいかなる時期にも、今日ほど戦争が永遠の平和に近づいたことはなかった。階級が出現したことによって、数千年にわたる人類の生活は戦争にみちてをり、あるいは民族集団内部で戦い、あるいは民族集団間で戦い、どの民族もどれほど多くの戦争をしてきたかわからない。資本主義社会の帝国主義時代にまで戦ってきて、それはとくに大規模で残酷なものになった。二十年前の第一次帝国主義大戦争は、過去の歴史では空前のものではあったが、まだ絶後の戦争ではなかった。いまはじまっている戦争だけで、最後の戦争に近づいており、つまり人類の永遠の平和に近づいている。……では、こんどの戦争が永遠の平和に近づいているというのはなぜか。こんどの戦争は、第一次世界大戦の時にすでにはじまった世界資本主義の全般的危機の深まりを基礎としておこったものであり、この全般的危機によって、資本主義諸国はあらたな戦争にかりたてられており、まず第一に、ファシスト諸国があらたな戦争の冒険にかりたてられている。われわれは、こんどの戦争の結果は資本主義が救われるのではなくて、崩壊にむかうことを予見できる。こんどの戦争は、二十年前の戦争よりいっそう大規模で、いっそう残酷であり、すべての民族がこれに不可避的にまきこまれ、戦争期間は非常に長びき、人類は多大の苦

痛をなめさせられるであろう。だが、ソ連の存在と世界人民の自覚のたかまりによって、こんどの戦争には、すべての反革命戦争に反対する偉大な革命戦争があらわれて、こんどの戦争に永遠の平和のために戦う性質をもたせることは疑いない。たとえその後になお戦争の一時期があるとしても、もはや世界の永遠の平和からは遠くない。人類が資本主義を消滅しさえすれば、永遠の平和の時代に到達し、そのときにはもはや戦争は必要でなくなる。そのときには軍隊の必要もなく、軍艦の必要もなく、軍用機の必要もなく、毒ガスの必要もなく、それからのちは、人類は何億万年も戦争にみまわれることがなくなる。すでにはじまっている革命的戦争は、永遠の平和のためにたたかう戦争の一部である。五億以上の人口をしめる中日両国間の戦争は、この戦争のなかで重要な地位をしめており、中華民族の解放はこの戦争をつうじてかちとられるであろう。将来を解放された新しい中国は、将来の解放された新しい世界と切りはなすことはできない。したがって、われわれの抗日戦争には、永遠の平和をかちとるために戦う性質がふくまれている」。また『持久戦について』の中で、彼が「中日戦争は中日両国を改造するであろう。中国が抗戦を堅持し、統一戦線を堅持しさえすれば、かならず、古い日本を新しい日本にかえ、古い中国を新しい中国にかえ、中日両国の人も物もことごとく、今日の戦争の中で、また戦争のあとで改造されるであろう」と言い、「敵は最後には失敗し、帝国主義制度全体の崩潰を免れることができぬ」と言っているのも、右の所説と無関係に考えることはできない。そうしてその後の歴史的事実が、彼の見透しの的確な正しさを見事に証明しているのである。

毛沢東の革命的戦争論が、ヘーゲル・シュタインメッツ・トライチケ等の絶対的戦争論と異なるものであり、クラウゼヴィッツ等の職業的戦争論ともまた異なるものであり、更にグンプロヴィッツ等の永久闘争論やトロツキーなどの永久革命論とも異なるものであることは、右の引用によって極めて明らかであろう。否、マルクス・エンゲルス・レー

ニンの武力的革命論を更に一段と発展させた毛沢東の革命的戦争論には、フィヒテの平和論や或る時代のラッセルの平和論に通じるものがあるだけでなく、本質的に言ってカントの永久平和論とも決して無縁のものではないとする評価をすることが必要であろう。彼があらゆる機会に平和を強調し、例えばアメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングに対して、「われわれ自身の願望についていえば、われわれは、一日といえどもたたかいたくはない」と言っていることによっても、彼がヘーゲルの如き戦争主義者でないことが明らかであろう。ただ彼は「矛盾の理論」を實踐する革命家であって、いわゆるパシフィストではない。右の談話で「しかし、もし情勢がわれわれをたたかわざるを得ないように追いこむのであれば、われわれは最後までたたかうことができる」と言っているゆえんである。「徹底的に殲滅してやれば、徹底的になっとくする」(『重慶交渉について』)と言っているのもその趣意である。また第三次世界大戦に反対し、これを恐れないと言っているのも、原水爆を恐れずと言っているのも、すべて戦争による「戦争消滅論者」(『持久戦について』参照)としてのその弁証法的な自信に従っているものである、と言えよう。「およそ敵が反対するものは、われわれはなんでも支持するだろうし、およそ敵が支持するものは、われわれはなんでも反対するだろう」と言う当然かつ不屈の断言も、その戦争消滅論の何たるかを示すものと言わねばならないであろう。その敵とは、彼によれば、「戦争を熱望する」死の商人、すなわち「少数の帝国主義国の侵畧によって金もうけをする若干の独占資本グループ」にほかならない。

また「共産党の指導する革命軍を創設し、革命戦争をおしすすめるのは、まさに戦争を永遠になくする条件を準備しているのである」という『矛盾論』の意慾的な一句は、永久平和のための人類の努力における中国という半植民地であった国の共産党の特別の任務を鮮やかに明言したものである、と言わなければならない。それ故「戦争と平和は

たがいに転化し合うものである。戦争は転化して平和になる。……平和は転化して戦争になる」(『矛盾論』)という彼の提言をとらえて、毛沢東を永久戦争論者であるかの如くに考えることの誤謬は、つづいて彼が「どうしてそうなるのか? 階級社会においては、戦争と平和という、こうした矛盾した事物が、一定の条件のもとで、同一性をそなえているからである」と言っている点を読みすごしているためであることはもちろん、前述引用の毛沢東意見をすべて看却しているためであろう。つまり、毛沢東戦争論についておかされているそのような誤解は、毛沢東理論の全体的な考察をしていないためであり、その本質をふんまえていないためであると言うことができよう。

四

永久平和の実現、または戦争消滅の実現のための革命的戦争を、その主体的側面から言って、大衆の戦争であると毛沢東は規定している。すなわち「革命戦争は大衆の戦争であり、大衆を動員し……大衆に依拠してはじめて戦争をすることができるのであり」、「真の金城鉄壁とは……大衆である」と断言して、人民を信頼し人民と一体となるべきことを説いている(『大衆の生活に関心を寄せ工作方法に注意せよ』参照)。「人民、ただ人民だけが世界の歴史を創造する原動力である」(『連合政府について』)と言い、また大衆こそは真の英雄である、大衆のあいだには、きわめて大きな社会主義的積極性が蓄積されていると言い、教条主義・経験主義・命令主義・追随主義・セクト主義・官僚主義・傲慢尊大主義のすべては大衆を無視しているからだ指摘して、大衆主義・人民奉仕主義を種々の場合に徹底して強調しているのである。また冒険主義も日和見主義も、すべて大衆の自覚に忠実でないための誤謬だと断じているのである。すなわち毛沢東は、「大衆こそは政治家であり教師であって、革命の政治科学あるいは政治技術を心得た政治専門家

は、大衆という幾百幾千万の政治家の指導者」（『文芸講話』）にすぎない、と見るのである。

彼は、戦争における大衆主義の詳論を、『持久戦について』中の『兵士と人民は勝利のもとである』という章において展開しているのであるが、全国的の団結の強調を前提として、「戦争の偉力のもっとも深い根源は民衆のなかにある。日本があえてわれわれをあなどるのは、主として中国の民衆が無組織の状態にあるからである。この欠点が克服されれば、日本侵略者は立ちあがったわれわれ数億の人民の面前にひきすえられ、火の海にとびこんできた野牛のようになって、われわれが一声叫んだだけでびっくりし、かならず焼け死んでしまう。……抗日のための財源には大きな困難はあるが、民衆を動員すれば、財政も問題にならない……このように土地が広く、民衆の多い国で財政窮乏を憂える理由がどこにあるか。民衆が軍隊を自分の軍隊とみなせるよう、軍隊は民衆と一体になるべきで、そうなれば、この軍隊は天下無敵となり、たかが日本帝国主義ぐらいをうちやぶることなど物の数ではなくなる」、と言っているのである。彼が解放軍とともに民兵を組織していったのも、このように革命戦争を大衆のための戦争であると確信に基づいていることが明らかであろう。それ故に、彼は逆に「人民の軍隊がなければ、人民のすべてはない」（『連合政府について』）、とも言っているのである。

かくして、毛沢東思想では、人民の軍隊は戦争をするだけでその能事終れりとしていない。すなわち「中国の紅軍は、革命の政治的任務を遂行する武装集団である。とりわけ現在では、紅軍は、けっしてたんに戦争だけをやるものではなく、戦争で敵の軍勢力を殲滅するほかに、さらに大衆に宣伝し、大衆を組織し、大衆を武装し、大衆をたすけて革命政権を樹立することから共産党の組織を打ちたてるまでのさまざまな重大な任務をになっている」（『党内のあやまった思想をただすことについて』）と言い、「われわれには、戦争する軍隊もあるし、労働する軍隊もある。戦争す

る軍隊として、われわれには八路军、新四軍があるが、この軍隊もまた、一方では戦争し、他方では生産するという二つの役を演じなければならぬ。……さらに大衆工作をおこなう能力を加えれば、われわれは、困難を克服し、日本帝国主義を打倒することができる」（『組織せよ』）。すなわち、いかなる帝国主義もわれわれの国土の侵襲に成功することは決してできない、と言っているのである。果してそのとうりに、彼等は大衆の戦争としての対「日」・対「蔣」の革命的戦争を持続して、その見込どりにこれを勝利に導き得たのである。毛沢東の大衆主義的革命的戦争の遂行においてのポイントが、人民尊重・兵士尊重の徹底ということにあることは言うまでもない。

『持久戦について』の中で、彼は次ぎの如くに言っている。曰く「将兵関係、軍民関係がうまくゆかないのは、方法がまちがっているからだとおもっている人がたくさんいるが、わたしは、つねにかれらに、それは兵士を尊重し人民を尊重するという根本態度（あるいは根本主義）の問題であるといってきた。この態度が出发点となって、いろいろの政策、方法、方式がうまれるのである。この態度をはなれば、政策、方法、方式もかならずあやまってくるし、将兵のあいだ、軍民のあいだの関係もけっしてうまくゆかない。軍隊の政治活動の三大原則は、第一が将兵一致であり、第二が軍民一致であり、第三が敵軍瓦解である。これらの原則が効果的に実行されるには、兵士の尊重、人民の尊重、すでに武器を放棄した捕虜の人格の尊重という根本態度から出発しなければならない。これらのことを根本態度の問題ではなくて、技術的な問題だと考える人びとは、ほんとうに考えちがいをしているのであって、ぜひ改めなければならない」。

同趣旨のことを、「反対者を射ちたおしたことがない」と言われる彼は他のところでも言っている。例えば『組織せよ』に於ても、「けっして軍閥主義を身につけてはならない。上官は兵士を愛護すべきであって、彼らに無関心で

あってはならず、体刑をくわえてはならない。軍隊は人民を愛護すべきであって、人民の利益をそこなってはならない」と言い、また「敵軍、かいらい軍、反共軍の捕虜にたいしては大衆がひどく憎み、どうしても殺さなければならなくても、しかも上級の許可を経ているもの以外は、一律に釈放する政策をとるべきである。そのうち、強迫されて参加し、多少なりとも革命性をもっているものは、大量に獲得してわが軍に勤務させるようにし、その他のものは、一律に釈放すべきである。もしも、またくれば、そこでまたとらえてふたたび釈放する。侮辱をくわえたり、物をとりあげたり、転向を強要したりせず、一律に真心のこもったおだやかな態度でとり扱う。彼らがいかに反動的であつたとしても、ひとしくこうした政策をとる。これは反動陣営を孤立させるのに非常に有効な手段である」(政策について)、と説いている。同称にまた『持久戦について』に於ても、「日本の兵士にたいしては、浮虜を寛大に扱う方法をとり、兵士の自尊心を傷つけるものではない、そうした自尊心を理解し、正しく導き、かれらが日本の支配者の反人民的侵略主義を理解するように指導する。他方においては、かれらの眼の前で、日本軍に殲滅戦による打撃をあたえ、中国の軍隊、人民の不屈の精神と英雄的な頑強な戦闘力を示すのである」云々と言っているのである。「三大規律」^(註)「八項注意」の軍規が夙につくられていたゆえんであろう。

革命的戦争における毛沢東の戦畧・戦術は、かくの如き大衆と兵士を基調とした、しかも極端に走らざる軍隊内民主主義、文化をもった軍隊・将校と兵士の相互教育と大衆的討論の必要の強調をもとにして、構築されているものである、と見なければならぬ。

(註) (一)あらゆる活動は指揮にしたがう。(二)大衆のものは針一本糸一すじといえどもとらない。(三)捕獲したあらゆるものは公のものにする」というのが「三大規律」であり、「(一)言葉づかいはおだやかに。(二)物の売り買いは公平に。(三)借りたものはかならず返す。(四)こわしたものはかな

らず弁償する。(甲)人をなぐったり、ののしったりしない。(乙)農作物を荒さない。(丙)婦人をからかわない。(丁)捕虜を虐待しない」というのが、「八項注意」である。その革命戦争主義が潔癖なる倫理主義・意思主義・精神主義に貫かれていることは、これだけを見ても明らかであろう。

五

革命的戦争は大衆の戦争でなければならぬとする毛沢東の人本主義的な戦争論が、反唯武器論をとっていることは、まことに自然と言えよう。

彼が、『持久戦について』に於て、日本の武器優位に恐れをなして生じた敗北主義に対して、「武器は戦争の主要な要素ではあるが、決定的な要素ではない。決定的な要素は、物ではなくて、人間である。力の対比は、軍事力および経済力の対比であるばかりでなく、人力および人心の対比でもある。軍事力と経済力は、人間によって掌握されるものである」と言い、またのちになって「原子爆弾は、アメリカの反動派が人をおどかすために使っているハリコの虎で、見かけは恐ろしくても実際にはけっして恐ろしくはない。もちろん、原子爆弾は、一種の大規模虐殺の兵器であるが、しかし、戦争の勝敗を決定するのは人民であって、一つや二つの新兵器ではない」「本当に偉大な力をもっているのは、反動派ではなくて、人民である」(『アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話』)と言っているのは、その反唯武器論が人民尊重・大衆尊重という人本主義の徹底に由来していることを明示しているものである。^(註)しかもそれは単なる人本主義ではなく、「矛盾論」的な(弁証法的な)人本主義に根ざすものである。すくなくとも、彼が原爆やアメリカ帝国主義を「ハリコの虎」だと言っていることを、単なる強がりやコケ脅しであるとすることはできない。すなわち彼は、ハリコの虎であった「中国の皇帝」・「ロシアのツァー」・「イタリアのムッソリニ」・「ドイ

ツのヒットラー」・「日本の帝国主義」がみな倒されてしまったと同様に、原爆をもってわが物顔にふるまっている米帝国主義もこれを打倒することが結局は可能だと言っているからである。しかしこのような反唯武器論が、決して武器を軽視するものでないことは、その後中国が原水爆やロケットの開発に力を入れてそれに成功しつつあることによっても、これを知ることができよう。ただ彼は、原水爆やロケット以上に、これをつくり、またこれを使用すべきか、使用すべきでないかを知っている人間と、かかる武器を滅し得る人間の力とを最も重視しているのである。

(註) 例えば次ぎの如くに彼は、同じくストロングとの談話の中で言っている。曰く、「……帝国主義とすべての反動派も二面性をそなえてをり、彼らは本物の虎でもあれば、またハリコの虎でもある」。しかも本物の虎が反動化して立ちおくれた場合、必ずハリコの虎に転化するといふのである。またハリコの虎を、「死んだ虎」「豆腐の虎」とも呼んでいる。そしてハリコの虎でも、一面では生きた鉄の虎となって人を食うことができるものであるから、これに対する正しい戦略と戦術が必要だということを強調するのである。

すなわち、毛沢東独特の戦略と戦術は、そこから打ち出されるものであって、反唯武器論はその戦略の基礎理論の一つとすることができるのである。かくして彼は、敵の「包囲討伐」に対して、これを「基本的にうちやぶる」ための反「包囲討伐」の作戦を練ったのである。すなわち彼は敵の進攻に対する防禦・敵の防禦に対する進攻の長期にわたるくりかえしを経験したことと、革命的戦争が進行するその過程には防禦もあり、退却もあるが、味方が強大となったときに始めてそのくりかえしが終って、敵は反「包囲討伐」をくわだてえないことになるのであるという見地から、革命戦争の勝利が確実なときのみ闘うという「戦略的防禦」論^(註)を展開しているのである。まさにこのような戦略的防禦論こそは、その持久戦術論の中核をなすものである。従ってそれは、ドイツや日本の軍閥の帝国主義的侵略戦争の戦略戦術とは全く対蹠的で類を異にするものであることが理解されるべきであらう。

(註) その「戦略的防禦論」にあるものは、包囲する敵を基本的に打ち破ろうとする反「包囲討伐」の民族的革命的精神であるが、敵を軽視する

こととみくびることを強く警しめ、すぐれた全戦役計画の見透しと準備を重視した退却と進抗の弁証法的戦争論を展開している。従って、そのような戦争論に於て全局の計算のない戦争・準備のない戦争などの否定されていることや、敵を知り味方を知ることの大事なことを孫子を引用しながら強調していることは言うまでもない。殊に、「一を以て十にあたる」戦略と、「十をもって一にあたる」兵力の集中的な使用による戦術との関係を論じて、碁における「一石のミスで全局を失う」ゆえんの説明をしているのも、その弁証法的戦争論の一面にほかならない。戦略的には持久戦、戦術的には十分に具体的な条件（十分なる準備・時機をつかむこと・兵力の集中・よき陣地の必要・運動中の敵陣地未完の敵を撃つこと等）に於ての、殊に包囲迂回戦術を軸とした速決戦というその持久的戦法も、例えば小さな火花で広野を焼きつくそうとする迅速隠密の走り廻る遊撃戦術（「兵力を分散させて大衆を動員し、兵力を集中させて敵に対処する」）「敵が進攻すれば退却する。敵が駐留すれば攪乱する。敵が疲労すれば攻撃する。敵が逃走すれば追跡する」 「固定した区域の割拠を波状的に広める」 「強敵が追跡して来れば旋回する」 「勝てなければ速やかに去る」 「短時間に優れた方法を講じて、多くの大衆を動員する」と言った内容の遊撃戦術も、敵の撃破よりは殲滅を目的とする殲滅戦術も、兵力集中の運動戦術も、要は戦争に於て主動的地位を取る目的を実現するための弁証法的戦争方法にほかならない。そのさい、「武器は敵から奪うこと、敵の軍需工業と敵の輸送隊に依存すること」「取るには先ず与えること」「敵の側面と背後で戦うこと」「敵を欺き敵を誤らせ、敵の弱点を衝くこと」「勝てないときには前進のために退却すること」などの必要を繰返しながら、その最も強調しているポイントは、「人民という条件」の重要性であり、人間の重要性である（『持久戦について』）『中国革命戦争の戦略問題』 『抗日遊撃戦争の戦略問題』 『小さな火花が広野を焼きつくす』等々参照）。そうして、そのような戦略戦術は、世界の改革を目的とした「人民戦争の基礎の上にうちたてられたものであり」、人民大衆の利益のために奉仕する軍隊あつてのものであるから、そのような戦術を利用しようとしても、それは「いかなる反人民的軍隊も利用し得るものではない」（『当面の情勢とわれわれの任務』）と、彼は言いきっているのである。

六

以上の論述によって明らかとなり、毛沢東の戦争論はその革命の実践に基づいた革命的戦争論であつて、好戦的な戦争論ではない。すなわち、第一には革命的戦争のみを肯定する戦争論で、革命を一種の戦争だとするものである。第二には革命的戦争のみが永久平和をもたらし、戦争を終滅にいたらせることができると説く一種の戦争終滅論である。

る。第三にはかくの如き革命的戦争の勝利の基礎は人民大衆にある、とする人民大衆的戦争論である。かくしてそれは、人本主義的な兵士尊重論となり、捕虜好偶論となり、反唯武器論となり、また侵略否定の徹底した防禦的戦略論となり、更にそれに基づいた特異の戦術論を伴っているのである。従って、戦術論を重点において、毛沢東の戦争論を云々することは、まさに本末顛倒と言わねばならないであろう。

要するに毛沢東の戦争論は、侵略主義的帝国主義的な不正義の戦争に対決して、戦争否定の論理（革命戦争本質論）と方法（戦略・戦術論）を実戦に基づいて展開したもので、些かの空論をとどめていない。精緻なる解析と評せられているゆえんであると思う。

この小論に於てはしかし、とくにその戦争否定のきわめてオプチミスティックな論理について、客観的にそのままにこれを明らかにしようとしたのである。決してそれ以上のものではない。

- 参考文献。（邦訳の『毛沢東選集』八冊・中国版『毛沢東選集』（一・二））中国版『毛主席詩詞』・尾崎庄太郎訳『矛盾論』『実践論』・『わが消滅戦』・市村水城訳『毛沢東語録』・[Selected military writings of Mao Tse-Tung]・只塚茂樹『毛沢東伝』・竹内実『評伝毛沢東』（竹内『新編現代中国論』所載）・武田泰淳『竹内実』『毛沢東その詩と人生』・中島嶺雄『現代中国論』・浅井敦『中国の革命』・岩村・野原『中国現代史』エドガー・スノウ『中国の赤い星』（宇佐見誠）『目覚めへの旅』（松岡洋）『中国 もう一つの世界』（松岡洋）・『中共雑記』（小野田・）・スメドレー『偉大なる道』（阿部知）・ドイッチャー『毛沢東主義』（山西英）・アーサー・イーコーエン『毛沢東—人と政策』・呂振羽（都留訳）
- 『歴史科学と毛沢東思想』（大隅逸）（郎訳）・大隅逸郎『中国新民主主義革命に関する一資料』・田畑忍『戦争の論理と平和の論理』『戦争と国際政治』
- 『中国人民解放軍と毛沢東の精神』等々）。

なお、この稿に於ての引用文は、種々の訳を随時不揃いのままに、また誰々の訳と明記せずに用いた。また表現を変えて用いたものもある。附言して諸訳者に謝意を表したいと思う。